慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アダム・スミスの生涯（一）
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1922
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.16, No.2 (1922. 2) ,p.211(61)- 237(87)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19220201-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

輕快なる
春向洋裝品悉く取揃
へ貴意に添るべし
御思案御無用直に鈴
木へ

慶應大學正門前
鈴木洋品店
高輪二三五三

古本の賣買は
義塾正門前の大進堂に限る
愈新學期來る此際萬卷の書を最も經濟
的に通讀せんとする人は先づ大進堂に
來つて問へ必す貴下の滿足に添はん

芝區三田東通り義塾正門前
大進堂書店
電、高輪三三六八

雜錄

アダム・スミスの生涯（一）

高橋誠一郎

アダム・スミスの生涯は先づ Dugald Stewart に由りて傳へられたり。初め彼れが一千七百九十三年一月二十一日及び三月十八日エヂンバアロオの王立協會に於て朗讀せる所にして、軈て一千八百十年幾多の脚註を添へ、單行書として出版せられ、更らに Sir William Hamilton の編纂せる The Collected Works of Dugald Stewart, Esq., F. R. SS. 第十卷（一千八百七十七年版）中に編入せられ（pp. 5-98.）、次いで幾度びかスミスの諸版本の卷頭に掲げられたる Account of the Life and Writings of Adam Smith LL. D. 是れなり。スチユアートの後にスミスを傳する者頗る多く、吾人は凡そ左記の諸篇を數ふるを得可し。

W. Smellie, Literary and Characteristical Lives, 1800, pp. 211-97.

W. Playfair, Life of Dr. Smith, before 1r. ed of "Wealth of Nations." 1805.

James Patterson (Kay の Edinburgh Portraits. 備考)。

Lord Brougham, Philosophers of the Time of George III, pp. 166-289.

J. R. MacCulloch, Sketch of the life and writings of Adam Smith (Treatises and Essays on subjects connected with economical policy, 1853, pp. 443-467.)。

（本篇は彼れの Accounts of The Lives and Writings of Quesnay, Adam Smith, and Ricardo, 1859. 中に含卷せられ、更らに同氏編「國富論」一千八百二十八年並に七十年版の卷首に掲げらる。）

Monjean (Coquelin, Dictionnaire de l'économie politique, II, p. 622-628.)

Baer, Adam Smith en zijn onderzoek naar den rijkdom der volken, 1858.

Léonce de Lavergne, Adam Smith (Revue des deux mondes, 2. pér. vol. 24, 1859, p. 893-929.)

Laspeyres, (J. C. Bluntschli u. K. Brater, Deutsches Staats-Wörterbuch, IX, S. 464-481.)

Puynode, Études sur les principaux économistes, 1868, p. 77-157.

T. Rogers, Historical Gleanings, 1869, pp. 95-137.

A. Oncken, Adam Smith in der Kulturgeschichte, 1874.

W. Bagehot, Adam Smith as a person (Fortnightly

Review, N. S. XX. 1876, pp. 18-42, 及び其の Biographical Studies, 1881.)°(其續は Journal des économistes, 3. série, vol. 43, p. 323-349. に載せらる)°

E. Nasse, Das 100 jährige Jubiläum der Schrift von Adam Smith über den Reichtum der Nationen. (Preuss. Jahrbücher, Bd. 38, 1876, Ss. 384-400.)

K. T. v. Inama-Sternegg, A. Smith und die Bedeutung seines Wealth of Nations für die moderne Nationalökonomie, 1876.

Helferich, Adam Smith und sein Werk über die Natur und die Ursachen des Reichtums der Völker, 1877. (其續は又 Zeitschr. f. d. ges. Staatswissenschaft, Bd. 33, 1878, Ss. 277-295. に載せらる)

v. Studnitz, Am Grabe von Adam Smith. (Die Gegenwart, Jahrg. 1876, Nr. 9.)

Stöpel, Adam Smith im Lichte der Gegenwart, 1879.

J. A. Farrer, Adam Smith (1723-1790), 1881.

E. Leser, Aus der Lebensgeschichte des Adam Smith, in Untersuchungen zur Geschichte der Nationalökonomie, I, Ss. 3-46.

A. Oncken, Kirkcaldy(Beilage zur Allgemeinen Zeitung, Jahrg. 1884, Nr. 288 u. 289.)

Neurath, Adam Smith im Lichte heutiger Staats-und Szoialanschauung, 1884.

Delatour, A. Smith, sa vie, ses travaux, ses doctrines, 1886.

R. B. Haldane, Life of Adam Smith (Great Writers Series), 1887.

J. K. Ingram(Encyclopaedia Britannica, 9th ed., XXII, 1887, pp. 169-171.)

Walcker, Adam Smith, der Begründer der modernen Nationalökonomie. Sein Leben und seine Schriften, 1890.

J. G. Courcelle-Seneuil, (Say et Chailley, Nouveau dictionnaire de l'économie politique, 1892, II, p. 810-814.)

John Rae, Life of Adam Smith, 1895.

H. C. Macpherson. 1899.

Leslie Stephen, (Dictionary of National Biography, vol. 53. pp. 3-10.)

James Bonar,(Palgrave, Dictionary of Poliical Economy, vol. III. pp. 412-424.)

E. Leser, in Conrad, Handwörterbuch der Staatswissenschaften, Zweite Auflage. VII, 1901, Ss. 749-757.

F. W. Hirst, English Men of Letters, 1904.

終中、其の參考書目詳細を極めてドクトル・ハーム以來、新たなる資料の提供せらるゝ所極めて多く、アダム・スミスに關する大作たるを信ぜざるべからざるものなり。ハーンの Life of Adam Smith. は

九十五年三月二十日、二十一日及び二十二日の通信に據れば、彼れの父は娶ること二回、スミスは一千七百〇九年を以て生れ、同五十年を以て逝けるヒュー(Hugh)なる異母兄を有したりと云ふ)。

彼れの父に就きては知る所極めて尠し。彼れはアバアディーン州(Aberdeenshire)の產にして、一千七百〇七年エジンバアロオの高等法院訴訟代理人(Writers to the Signet.而も Hirst は曰く辯護士と、前掲p.2)の組合に加入するを得て、同市に於て法律事務を取扱ひ、翌年蘇格蘭士大臣兼大蹟官ラアヴドウン伯 (Earl of Loudoun, or Loudon) の秘書役と爲り、同十二年ラアヴドウン伯の退隱に由りて、其の職を失ふと共にカアコディオイ區の關稅吏 (comptroller of the customs) に任命せられ、死に至るまで其の職を奉せり。彼れは又た一千七百〇七年以來、終生、英蘇併

合と共に新設せられたる蘇國軍事裁判所參事官(Judge Advocate)を兼ねたり。是れに由りて觀れば彼れは決して凡庸の器に非ざりしが如し。

スミスは元來蒲柳の質にして、幼時を通じて多病なりしが爲めに、母の心遣ひ例ふるにものなく、餘りに之れをあまやかせ過ぐるの非難を受けたり。而も斯くの如き母の溺愛は其の子の氣質若しくは性情の上に聊かも有害なる影響を生ずることなく、彼れは六十年の長歲月を通じ孝行の限りを盡して母の慈愛に報ひたり。彼れは幼時に於てすら人中に在りて放心の狀態に陷り、單座して獨語するの習慣を有したるが終生之れを廢すること能はざりき。

彼れは三四才の頃、母に伴はれてリーヴン(Leben)河畔なるストラッスエンリーに其の小父ダグラスを訪へることありしが、一日門前に獨り遊びて、恰も此處を通過せる一群の浮浪の徒(蘇國に於て tinkers と稱せらるゝもの)によりて拐され、暫く行末を求め兼ねたるが、間もなく一紳士の來りて、數哩あなたに於て物哀れに號泣せる一人の幼兒を抱けるジプシーの女に遭遇せる旨を告げたり。時を遷さず、指されたる方向に向つて驅せたる搜索隊はレスリー(Leslie)の森に於て其の女を發見せり。ジプシーの女は彼れ等を見るや否や、幼きスミスを拋げ捨てゝ走れり。斯くて彼れは恙なく其の母の懷に歸るを得たるなり。

スミスは其の最初の教育をカァコオディ邑の文法學校に受けたり。當時其の校長たりしものは令名嘖々たりしデヴィッド・ミルラー(David Millar)氏なりき。スミスが入學の年月は不明なるも、恐らくは一千七百三十三年を以て羅典語を學び初めたるなる可し。當時羅典語入門の教科書として使用せられたるものはユートロービウス(Eutropius)の「羅馬史要」(Breviarium ab urbe condita)なりしが、一千七百三十三年五月四日の日附と共に彼れの自署を有する同書は後年故カンニンガム(Cunningham)教授の所藏する所なりき。スミスは當時早く旺盛なる讀書慾と强大なる記憶力とを以て顯れ、其病弱なる體軀は激烈なる遊戲に加はるを得ざらしめたりと雖も、而も彼れは一面に於て熾烈なりしも他方に於て著しく深切にして大まかなる氣質を有したるが爲めにいたく其の朋友に愛好せられたり。彼れの同窓にして後年名を成すに至りしもの少なからざりき。

當時カァコオディには一二の製釘所存したるが、スミスは少時之れを訪ふことを好み、茲に分勞に關する最初の觀念を取得せりと傳へらる(Campbell, Journey from Edinburgh through North Britain, 1802, ii. p. 49.)。

二

一千七百三十七年、スミスはカァコオディの文法學校よりグラスゴー大學に赴き、此處に同四十年まで在學し、更らにスネル(Snell)基金の給費生として牛津大學ベリオル、カレッヂ(Baliol or Balliol College)に入れり。グラスゴー大學時代のスミスと同窓なりしハーグ大使館附牧師アーチバルド・マックレーン博士(Dr. Archibald Maclaine—ヨハーン・ローレンツ・フオン・モースハイム Johann Lorenz von Mosheim. の翻譯者にして、又た神學上の數著あり)曾つてダッガード・スチュアート(Dugald Stewalt)に談りて曰く、スミスが同大學在學當時に於て愛好せる研究は數學及び自然哲學なりきと。スチュアートの父にしてエヂンバァロオの數學教授たりしマシュー・スチュアート(Matthew Stewart)も亦た、當時スミスの同窓たりし人にして、ダッガードは其

の父がスミスと相識るに至りし當時彼れの努力しつゝありしものにして、有名なるロバート・シムソン（Dr. Robert Simson）教授が實習用として彼れに與へたる難解なる幾何學上の問題に就きて彼れを想起せりと云へるを記憶する旨を記せり（D. Stewart, Account of the Life and Writings of Adam Smith L. L. D., from the Transactions of the Royal Society of Edinburgh, read January 21, and March 18, 1793. in the Collected Works of Dugald Stewart, Esq., F. R. SS., ed. by Sir W. Hamilton, Vol. X, 1877, p. 7.）。スミスは一千七百九十年僅かに其の死に先立ちて出版せられたる Theory of Moral Sentiments. の新版に挿入せる一章句に於て多大の尊敬を以てシムソン及びスチュアートの二人に言及せり（ibid, i. 313.）。

スミスは彼れがグラスゴーを去るの前に出席せるフランシス・ハッチェソン（Francis Hutcheson）の雄辯にして、然も深遠なる講義によりて最も力強き永遠の感化を受けたり。スミスは常に最も熱烈なる讃美を以て彼れを說けり。ハッチェソンは謂ゆる功利主義の倫理學說を創唱せる者の一人なり、斯學說の心隨たる人間行爲の理想を、之れに由りて誘致する「最大多數の最大幸福」に求むるの思想は早く彼れに於て看出さる可きものなり。（Inquiry into the Original of our Ideas of Beauty and Virtue, 1720, § 3.）。彼れの主著 A System of Moral Philosophy.（此の著の出版せられたるは著者の死後、即ち一千七百五十五年なりと雖も、其の成れるは一千七百四十二年なり）は貿易の平衡、國家的制規及び人口等に關しては猶ほ幾分マーカンチリスト流の思想を有せざるに非ざるも、而も後年グラスゴー大學に於ける其の講座を繼承せるアダム・スミスが其の「國富論」中に表明せる諸理論を預示する幾多の章句を包有するなり。彼れは「あらゆる價値若しくは價格の自然の基礎は或る種の用なり」、「富は勞働に由りて效用より區別せらる」而して「供給の限定は稀少價値を生ず」と稱して效用と價値とを區別せり（ibid, Vol. II. pp. 53 ff.）。即ち彼れは勞働が富の大源泉にして價値の眞尺度たることを主張し、總べての人は、公の利益が他を要求す可き場合を除き、他人の身體又は財產に對して何等の毀害をも加ふるとなき、如何なる仕事又は娛樂に於ても自己の目的の爲に自己の欲する所に從つて其の能力を使用するの自然權を有することを宣言せり。彼れは又た分勞の極めて重要なる所以を力說し、又た彼れが貨幣價値の起源及び變動並びに穀物若しくは勞働が更らに確固たる價値の標準を與へ得可きことを信ずるの意見は「國富論」中に於けるスミスのそれと酷似するものあるなり。彼れは此の書の第二編第七章に於て公有及び私有財產を論じたり、而して彼れは普通近世經濟學者によりて慣用せらるゝ所とは幾分相違せる方法を以て私有財產を說明し擁護せり。「吾人が他の方法を以て自活し得る場合に總べて他人の無害なる計畫を破毀するは不道德なり、而して吾人が最初の占有者の權利を尊重する所以のものは這般の不道德に基礎を有するものなり」（ibid, Bk. II. chap. vi. § 5. 尙ほ Institutio Compendiaria, Lib. II. c. v. 參照）と說けるハッチェソンの所言はアダム・スミスが其の「法律學講義」に於て常に敎授せる特異の財產權說に暗示を與へたるものなりと云ふ。即ち財產權は先占者が其の取得し若しくは發見せる客體を安全に享有せんとする正當なる期待（*reasonable* Expectation）に對する人類の一般的同情、並びに公平なる傍觀者が斯くの如き正

當なる期待が裏斷らるゝを見るの際に彼れの感ずる憤怒に基くものなりと做すもの即ち是れなり。(Stewart, Philosophy of the Active and Moral Powers of Man, in the Collected Works, Vol. VII, 1877. p. 263.)。彼れが資本の起源を考査せるの邊に於ても亦た、スミスとの顯著なる類似を認めざるを得ず。(W. R. Scott. Francis Hutcheson: his Life, Teaching, and Position in the History of Philosophy, 1900. 及び Cannan's edition of Smith's Wealth of Nations, 1904, vol. I, Introduction, pp. xxxvi-xliii. 參照)。

而して若しデヴィド・ヒューム(David Hume)が一千七百四十年三月四日附を以てハッチェソンに與へたる尺牘中に見ゆる「スミス氏」を以て果してアダム・スミスなりとせば、當時僅かに十六才の少年なりし彼れは近く出版せられたるヒューム氏 Treatise of Human Nature の要旨を說したるものゝ如し。

三

スミスは一千七百四十年六月、蘇國を出發し、全行程を驛馬に託して牛津に向へり。彼れは後年サミュール・ロージャース(Samuel Rogers)に物語れるが如く、英蘇の境を通過せる瞬間より、新たに見る國土の豐饒と其の農業が自國に比して遙かに卓越せるを深く感ぜざるを得ざりき。

彼れはベリオル、カレッヂの食堂に着ける第一日に食卓に向ひて空想に陷り、暫く其の食事を忘れたり。給仕學生(servitor)彼れを呼び醒まして曰く、蘇國にては今汝の前に置かれたるものゝ如く見事なる肉片を見ること能はざるが故に須らく冥想を廢して、速かに貪り食ふ可しと。Monthly Review 記者の所言に據れば、彼れは自己の食卓に大肉片の現るゝ度毎に好んで此の物語を偽せりと言へり。

彼れは七月七日を以て同大學の入學を許されたり。彼れは其の最後に至るまで變ることなかりし小學生徒流の正しき書體を以て入學簿に "Adamus Smith e Coll. Ball., Gen. Fil. Jul. 7mo 1740." の文字を止めたり (Thorold Rogers's ed. of the Wealth of Nations, I. vii.) 彼れは自ら曰く文筆上の述作は彼れに取りては經驗を重ぬるも毫も容易と爲ることなしと、而して筆跡に於ても亦た然りしなり。彼れの書狀は悉く同一なる正しき大文字を以て記され、明かに遲鈍、難澁愼重なる手法を以て成れるを示しつゝあるなり。

スミスは其の入學より六年間、學年休暇にも歸省することなくして引續き牛津に留れり。蓋し當時に在りて費用極めて大なりし蘇國の往復は年四十磅の給費生に取りては堪え難きものなりしなる可し。一千七百四十四年、即ちスミスの牛津在學中に出版せられたるサムアン(Salmon)の Present State of the Universities. に據れば牛津學生生活の要したる最少限の經費は一ヶ年三十磅なりしと雖も、同大學の自費生(commoner)にして六十磅以上を消費せざるもの極めて稀なりしと言ふ。スミスは一千七百四十六年八月十五日まで牛津に留まりしもの、如く、同日以後の同大學飲食物賣場會計簿 (Battery Book) には彼れの姓名を見ることなし。

スミスの名はブリッス(Bliss)の牛津卒業生名簿には見當らず、又たフォスター(Foster)氏の Alumni Oxonienses. は彼れに關する他の事項を掲ぐるも、其の卒業に就きては記する所なし。而もロージャース教授が前掲飲食物賣場會計簿に據りて調査せる結果は一千七百四十四年四月十三日を以て終れる週間より以後は彼が常に Dominus と稱せられつゝあることを發見せり。

ドミナスは大學得業士(Bachelor of Arts.)の通稱なりしなり。彼れは恐らく卒業の形式を完成するに必要なる一定の手續を缺きたるなる可し。

彼れは不幸にして牛津大學の長き暗黑時代中に在學せり。スミスが自ら後年其の「國富論」中に於て英國諸大學に就きて云々せる所のものは又た實に三十年前、彼れの在學當時に於ける牛津大學の狀態なりき(Wealth of Nations, Bk. V., chap. i, pt. iii, art 2. 參照)。而も彼れが同大學在學の期間は決して彼れに取りて徒爲なるものには非ざりしさ。彼は後年公然之れに對して感謝の意を表しつゝあるなり（一千七百八十七年十一月十六日附グラスゴー、カレッジ學長アーチバルド・デヴィッドソン(Archibald Davidson 宛の信書參照)。彼れは全力を擧げて同大學の常規の課程に修學することなく、主として其の研究を古典及び美文學(belles lettres)並びに精神科學及び政治科學に向けたり。殊に彼れは佛國古典の語格を愛し、自己の文體を改善するの目的を以て屢々其翻譯に努めたりと言ふ。後年エヂンバァロオ大學希臘語教授アンドリュー・ダルヅエル(Andrew Dalzel)はダッガアド・スチュアートに向ひて言語學上の問題に關するスミスの記憶の敏速且つ正確なること及び希臘語文法の微妙なる諸點に關して彼れの示せる怜悧と熟練とを口を極めて賞讃するの常なりきと言ふ。(Stewart, op. cit., p. 9.)。彼れは斯くの如き知識を牛津に於て得たること固より疑ひなき所なり。彼れは又た伊太利亞の詩文にも通曉し之れを引用すること自在なりき。

ベリオル、カレッヂは好學の風を有するものに非ずと雖も、ボードリー圖書館(The Bodleian Library)が一個無比の寶庫たるの階梯に對して利用を許されざりし時代に在りては同大學に於ける最良なるカレッジ圖書館の一を有するの一大利益を有せり。此處に彼れは自由なる讀書の界域を與へられて、其の健康を破ることをすら忘れて出精せるなり。然れども此の學園には彼れの自由に食ふことを許されざりし唯一の禁制の果實ありき。即ち近世合理主義の所產是れなり。ジョン・ラムゼー・マッカロック(John Ramsay M'Culloch)は談りて曰く、スミス猶ほ牛津に在りし時、彼れが私かに研究しつゝある所のものに就き其の上長の疑念を釀しつゝありしが、一日其のカレッヂの寮長等が不意に彼れの部屋に來れるの時、彼れは不幸にしてヒュームのTreatise of Human Nature. を耽讀しつゝあるを發見せられたり。斯くて此の「不都合なる」書籍は沒收せられ、此の青年哲學者は嚴烈なる譴責を受けたりと。(J. R. McCulloch, Accounts of the Lives and Writings of Quesnay, Adam Smith, and Ricardo, 1859. pp. 19-20.)。

研究資料の豐富を除きてはスミスの牛津生活は決して幸福なるものに非ざりしが如し。第一に擧ぐ可きは彼れの健康勝れざりしことにして彼れは「痼疾の壞血病と腦の震戰症」(an inveterate scurvy and shaking in the head.)に惱み、近くバアクリー僧正(George Berkeley)が萬病癒治の妙藥として熱心に其の效用を皷吹せる參兒水(tar-water)を使用しつゝありしなり。(一千七百四十四年七月末に其の母に送れる信書)。彼れは一千七百四十三年十一月二十九日の書中には「小子は恰も此の三ヶ月間小子をして其の肘掛椅子より離るゝこと能はざらしめたる懶慢の劇烈なる發作より回復したる所に候」と述べたり。(Lord Brougham, Men of Letters, ii. p. 216.)。(ブロオム卿はスミス傳を草するに當り一千七百四十年

より同六年に亘り彼れが幾通の信書を利用することを得たりと雖も、而も是れ等のものゝ殆んど全部は純然たる家事及び私事に關するものにして、其の大部分は彼れのシャツ類其の他此の種の必要品に關するものなるも、而も皆な悉く其の母に對する强烈なる愛情の發露を示すものなりと)。第二に蘇國の學生はペリオル、カレッジに於て繼子の待遇を受け、スネル給費生は其の虐遇に憤慨して、グラスゴーの評議員(Senatus)に對して常に不平を訴へ、終には他のカレッジに轉せんことをすら希望するに至れり。然ればスミスが牛津六ヶ年の在學中に於て其の親友中に擧ぐ可きものは僅に同鄕の人にして、同じくスネル給費生たりしソールスベリーのダグラス僧正一人あるのみなりき。彼れは一千七百四十六年八月を以て蘇國に歸れり。爾後スミスは再び牛津に足を踏み入るゝことなく、牛津も亦彼れを念頭に置くことなく、スミスが其の大名を成すに至りて後も、之れに博士の稱號を贈るが如きことなかりき。スミスは此の留學中に於て狹音の英語に感染することなかりしも、而も宏音の蘇國辯を失へるが如し。後年蘇國の史家ウヰリアム・ロブアトソン(William Robertson)若しくは修辭學者ヒュー・ブラー(Hugh Blair)に會して後、スミスを訪へる英人は彼れが純粹なる英語を以て會談するに驚けりと言ふ。

四

スミスは一千七百四十六年秋より同四十八年秋に至る滿二ヶ年間、何等正規の業務に就くことなく、唯だ其の好む所の研究に耽りながら、母と共に鄕里に留まれり。彼れは初め英國教會に入るの運命を有し、而して其の目的を以て牛津に派遣せられしものなるが、而も僧職は其の趣味に適せざりしが故に、其の友人等の忠告に悖りて蘇國に歸れるなり。彼れ去りて後、數ヶ月猶ほ牛津大學の帳簿には彼れの名を留めたり。

スミスは一千七百四十八年の後期に至り、エヂンバラーに其の居を卜し、ケームズ卿(Lord Kames)、即ち當年のヘンリー・ホーム氏(Mr. Henry Home.)の勸奬に由り、同學年及次ぎの二學年を通じて、修辭學及び美文學の講義を行へり。這般の題目は當時に在りて頗る嶄新なりしのみならず、未だ何人も之れに關して公會の講演を行へる者あらざりしなり。彼れはケームズ卿を首めとして、後の英國大法官アレグザンダー・ウッドアバアン及びサー・ウイリアム・バルトニー(Sir William Pulteney)として久しく議會に雄飛せるウイリアム・ジョンストーン(Johnstone)の如き法學生、並び前揭のブラー博士の如き同市の青年法敎師、其の他老若多數の聽講者を有せり。スミスは是れに由りて正味一百磅の收入を得たりと言へば、一人の謝禮一ギニーと假定し、聽講者の數は一百名以上に達せしなる可し。是れ等の講義は一も出版せらるゝことなくして終れり。然れどもスミスの開演後十年、一千七百五十八年に同一題目の講演を開始せるブラーの記する所に據れば、是れ等のものは系統的形態に於て行はれたるものゝ如し。即ち彼れが一千七百八十三年を以て出版せる Lectures on Rhetoric and Belles-Lettres. の第十八講備考に於て彼れはスミスが久しき以前に其の一部を彼れに示した修辭學講義の草案より文體の一般的性質、殊に平易質實なる文體に關し、又た此の點に於て傑出せる英國作家に關し幾多の觀念を借用せる旨を記せり。(ibid., i. p. 381.)。而もスミスの友人の多數は這般の感謝を以て甚だしく不十分なりと思料し、ブラー傳(一千八百〇七年)を草せるヒル(John Hill)はスミス自身も亦

た其の友人等と共に不平の語氣を漏したりと稱せり。然れども爰に亦た之れと全然相反する印象を與ふる逸事あり。そは Man of Feeling の著者ヘンリー・マッケンジー(Henry Mackenzie)が詩人サミュエル・ロージャス(Samuel Rogers)に物語れる所のものなり。マッケンジーはスミスが會話の豐富なるを說き、彼れは幾度びか「足下よ、足下の言へる所のものは優に一卷の書を成すに足れり」と云ふの常なりしことを物語れる後、ブラーが屢々其の說敎中に彼れがスミスとの會談より得たる法律學上の思想を取り入れたることをスミスに物語れる旨を記せり。而してスミスは之れに答へて曰く「吾人は頗る快く彼れを迎ふ、猶ほ餘す所多し」と(P. W. Clayden, Early Life of Samuel Rogers, 1887, p. 168)。

加之ならず、ブラーがスミスに負ふ所あるを告白せる第十八及び十九の兩章に就きて案ずるに彼れが借用せる所のものは必ずしもスミス獨特の思想と稱す可きものにあらざりしが如し。

今、スミスの著述中に散見する所、又たは友人等の記憶に存する其の談片を基礎として彼れが文學批評家としての意見の一端を窺知するを得可し。ウォヅウォス(William Wordsworth)は其の Lyrical Ballads(1798.)の序文に於て彼れを呼ぶに「此の種の雜草を生ずること自然なるの觀ある國土、蘇格蘭土の產したる(デヴイッド・ヒュームを除きては)最惡の批評家」を以てせり。スミスは浪漫派よりも古典派を選べり。彼れはヴォルテール(Voltaire)と等しく、シェクスピアは優れたる場面を描けりと雖も、優れたる戲曲を草することなかりき、而して彼れはドライデン(Dryden)よりも大なる劇的天才を有せりと雖も、ドライデンは彼れに比して大なる詩人なりと思惟せり。彼れはミルトン(Milton)の小詩を蔑視し、パアシ(Thomas Persy)が其の Reliques 中に蒐集せる古き英國の小唄に至りては更に之れを尊重せる所少なきも、而もポープ(Pope)に對しては大なる嘆美を有し、グレー(Gray)にして單に今少しく多くを草せりとせば、彼れは英語を以てせる最大の詩人なりしなる可しと信じ、而してラシーン(Jean Baptiste Racine)の Phaedrus を以て世界のあらゆる國語に於て現存する絕好の悲劇なりと倣せり。文學美に對する彼れ自身の大標準は彼れが其の Of the Nature of that Imitation which takes place in what are called the Imitative Arts. (Essays on Philosophical Subjects, 1795, pp. 134-184.) 中に定めたる「美は常に打ち勝たる可き知覺せられたる困難に比例す」と云へる原則に存するなり。

スミスが此の當時詩人たらんとするの野心を有せりと倣するの言傳は惟りコールトン(Charles Caleb Colton)の Hypocrisy. 中に引喩せられたるのみならず、彼れが逝去の翌年即ち一千七百九十一年の The Bee 誌上に揭げられたる無名氏との談片中に現れたるスミス自身の告白によりて確保せられたり。即ち彼れは其の客に對してミルトンのそれを除き一切の無韻詩に向つて假借なき侮蔑の言を發し、而して其の生涯を通じて唯一の韻詩をすら看出し得ざりし彼れと雖も、尙ほ其話說し得ると等しき速かさを以て無韻詩を作り得可しと云へりと報せられたり。因に記す、彼れが無韻詩を嫌惡せることに就きては興味ある挿話あり。一千七百五十九年グラスゴー・カレッヂに於けるスミスの英文學の講義に出席せるボズウル(James Boswell)が是れより四月の後に至り、スミスが是れ等の講義に於て無韻詩を罵り、韻詩を稱揚せる强烈なる意見を表明せる旨をジョンソン(Samuel Johnson)に告

げたる時、ジョンソンは非常なる喜悅を以て彼れに言ひて曰く「君よ、余は曾つてスミスと共にありて、我れ等は互に親しむことなかりき、然れども余にして若し君が今余に物語りしが如く彼れが韻詩を愛すること大なりしことを知りしならんには余は彼れを抱きゞめしなる可し」と。

彼れは每冬期引續き三ヶ年間英文學に關する講義を行へる外、少くとも一千七百五十年より同五十一年に亘れる冬期に於て經濟學に關する講義を行へり。此の講義は一千七百四十九年に物せられたる所にして、其の中に於てスミスは商業自由の學說を主張せり。彼れは此の事實を後年スチュアートの所藏に歸せる一千七百五十五年グラスゴーの某學會に於ける講演草稿中に自ら記しつゝあるなり。(Stewart, Works, op. cit, vol. x. p. 68.)。當時彼れの思想の上に有力なる影響を及ぼしつゝありしものにジェームズ・オスワルド (James Oswald) あり。彼れはスミスに比して八才の長者にして後、商務及び拓殖事務官、大藏參事官、並に愛蘭大藏次官と爲り、一千七百六十八年五十二才の壯齡を以て逝ける人なり。スミスがオスワルドに傾倒せることヒュームに讓らざりき。(Memorials of the Public Life and Character of the Right Hon. James Oswald of Dunikier, 1825, Preface; Stewart, op. cit, p. 81.)。ヒュームは早く一千七百五十年、其の有名なる「貿易平衡」論（同五十二年に至り其の Political Essays. 中に出版せられたるもの）の手書をオスワルドに送りて其の意見を徵せり。オスワルドは十月十日 Caldwell Papers に掲げたる長文の書簡中に於て之れに答へたり。(i. 93.)。彼れは其の物產及び貨幣を空竭せしめらる可しと做す諸國民間に於ける嫉妬は全然不合理たる可きことを宣言し、斯くの如き事實は人民と產業の殘存する限り決して生起することなし、貨物及び貨幣の輸出禁止は常に其の所期に正反對の結果を生じたることを主張せり。即ちそは國內の耕作を增加せずして却つて之れを減少し、而して物產の輸出を防止すること愈々大なれば貨幣を國外に驅逐すること愈々大なりと做せり。

スミスは又たジェムス二世黨 (Jacobite) に與せるが爲めに當時ルーアン (Rouen) に亡命しつゝありし The Braes o' Yarrow. の作者ウイリアム・ハミルトン (William Hamilton) の友人等の依賴を受けて其の詩集を纂輯出版せり。一千七百四十九年ロバート・フールヅ (Robert Foulis) 刊行グラスゴオ版 Poems on Several Occasions. 即ち是れなり。本書は一千七百四十八年十二月二十一日グラスゴオ附の序文を揭げたり。スミスの筆に成れるものなり。彼れはハミルトンが一千七百五十年特赦を受けて歸國してより、同五十二年再び病魔に追はれて大陸に流寓するに至る短少なる其蘇國の滯在中に於て之れと親交を結べり。一千七百五十八年の第二版にはハミルトンの名を揭げ、第一版の序文中に其の收錄せる幾多未刊行の詩篇を寄せたる人として擧げられたる詩人の友人にしてクラスゴオの商人なるウイリアム・クロフアド (William Craufurd) に對する獻本之辭を載せたり。一千七百五十七年十二月、史家サー・ウイリアム・ダルリムフル (Sir John Dalrymple) がスミスに請ひて此獻本之辭を起草せしむることをフールヅに依賴せる書簡によりて案ずるに恐らくそはスミスの手に成れるものなる可し。(Duncan, Notes and Documents illustrative of the Literary History of Glasgow, p. 25; James Paterson's new edition, 1850, p. 10.)。

五

スミスは其のエヂンバァロオに於ける講演の好評なりしが爲めに一千七百五十一年一月九日を以て、其の前年ルードン（Loudon）氏の逝去に由りて空虛と爲れるグラスゴー大學論理學講座に選任せられ、同十六日就任式を了したるも、十月に於ける次期の開始に至るまで授業を行ふことなかりき。蓋しエヂンバァロオ於ける講義を完了するの必要ありしが爲めなり。因つて一月より六月末に至るまで法律學教授ハーキュリーズ・リンゼー博士（Dr. Hercules Lindsay）其の代講を行へり。然るに同大學に在りて精神哲學の講座を擔任せるハッチェソンの直接後繼者Thomas Craigie氏病氣休講の爲め彼れは又た精神哲學の講義を行はざるを得ざりき。而して此の二重の負擔は疑ひもなく彼れが既にエヂンバァロオに於て行へる講義の資料を利用することを得たるが爲めに少なからず輕減せらるゝを得たりしなる可し。蘇國の諸大學に於ける教科の傳統的分配によれば、論理學の講座は修辭學及び美文學を抱擁し、精神哲學は法律學及び政治學を包含せるが故に、スミスは曩きに講述せる修辭學及び美文學並びに法律學及び政治學に關する項目を以てグラスゴーに於ける第一期講演の題目たらしめたり。（Stewart, op. cit, p. 11. 所載ジョン・ミラー氏の所言並びにThomson and Craigie, Life of William Cullen, vol. I., 1832, p. 605. 所載一千七百五十一年九月三日醫家カルレン宛スミスの書翰參照。）

然るにCraigieは終に同年十一月二十七日を以て長逝し、翌五十二年四月二十九日、スミスは何等の反對をも受くることなくして其の後繼者に任命せられたり。然るに早くよりして斯くの如き結果を豫想し、軈てスミスの去る可き論理學の講座に對し、冬期の全部を通じて激烈なる競爭行はれたり。デヴィッド・ヒュームは其の候補者として現れたり。猶ほエドマンド・バアーク（Edmund Burke）も亦た當時其の候補の一人なりと云へる虛妄の傳說すら傳はれり（Bisset, Burke, i. 32; Prior, Life of Burke, Bohn's ed. p. 38.）。然れども後一千七百七十四年より一千八百二十四年に亙りて同講座を擔任せるOutlines of Philosophical Education, 1818.の著者ジャアヂン（George Jardine）教授は、選學人中にはバアークを以て適任と思惟せるものありしも然も事實彼れは候補者として現れたることなしと主張し（Outlines of the Philosophy fo Education, p. 23.）、スミスは明かにスチュアートに談りて、彼れは斯くの如き流說の生じたる所以を知らず、或ひは彼れが自らバアークの著Sublime and Beautiful. の出版に際し、若し此の書の著者にして一講座を擔任することを承認せんか、そは本校に取りて大なる所得たる可しとの意見を表明せるより生じたるものには非ざるかと言へりと傳へらる。（Prior, op. cit., p. 38.）。ヒュームはカルレン等の熱心なる後援ありしに拘らず、アーガイル公（Duke of Argyle）の干涉によりて其の目的を達すること能はず（公は王室講座以外に對しては毫も任命の權を有せざりしと雖も而も其の一切に對して干涉する所多く、且つ多大なる勢力を有したりと信ぜられたり）、同講座はクロー（Clow）と稱する無名の青年教會學士（licentiate）に與へられたり。スミスは固より如何なる候補者よりも其の親友ヒュームを以て勝れりと思惟せりと雖も、而も彼れの如く懷疑論者として一般に認められつゝある人物を選任するは蘇國の輿論に悖り、同大學に取りて不利益と爲るの虞れあることを熟知せり。（一千七百五十

一年十一月火曜日附カルレン宛書簡參照 Thompson, op. cit, i p. 606.)。

スミスが精神哲學の講座を選べるは主として其の中に於て教授せらる可き題目に興味を有したるに由ること疑ひなき所なりと雖も、是れより生ずる物質上の所得も亦た幾分大なりしが如し。蓋しスミスは其の就任の條件として同年十月十日(新學年開始の當日)に至るまで、其の論理學教授の現職に對する俸給及び所得を以て滿足す可きことを特に要求せられたるを以てなり。精神哲學教授の所得は俸給及聽講學生によりて支拂はるゝ謝禮より成る。俸給は數學講座が一ケ年七十二磅なりしと云へば (Caldwell Papers, i. 170)、恐らく其の以上に出づることあらざりしなる可し。スミスの後に精神哲學の講座を擔任せる蘇國哲學派の創始者トーマス・リード博士(Dr. Thomas Reid)はグラスゴオに於ける二ケ年の經驗の後、鄕里アバアディーンの一友人に書を寄せて、彼れはスミスが曾つて有したるよりも多數の學生を有し、既に七十磅の謝禮を收受せりと雖も、全部の學生にして到着せんか、同學年には一百磅を收得す可きを期待すと云へるによりて案するに (Sir William Hamilton, Reid, 1853, p. 40.)、スミスの受けたる謝禮は恐らく一百磅を越ゆることなかりしなる可し。第十八世紀に於ける蘇國大學の講座に對する謝禮の高は收穫の豐凶、景氣の善惡に由りて學年毎に著しく變動するを免れざりき。スミスは又た其の住宅に時々一人の寄宿生を置き、是れに由りて幾分の利得ありしも、其の正規の所得は一ケ年百七十磅以上に出づることなかりしが如し。彼れは其の俸給の外に同大學構内に住宅を給せられ、而して其の十三年間の在職中に三度び之れを轉じたりと傳へらる。即ち或る家屋が朋屋と爲りたる時は諸教授は其の席次に從ひて選擇權を有するの慣習なりき。斯くて彼れは一千七百五十六年其の友人カルレンがエヂンバアロオに轉任するや、其の舊宅に移り、次いで五十七年、同じき年に逝去せる自然哲學教授ディック (Dr. Dick) の住宅を襲ひ、更らにリーチマン (Dr. Leechmann) が同六十二年を以て學長 (Principalship) に榮轉すると共に其の舊居に轉ぜり。彼れは當時其の母並びに其の小母ジェーン・ダグラス孃 (Miss Jane Douglas) と共にグラスゴオに居住せるを以て、斯くの如き頻々たる轉居も或ひは是れ等女性の希望に出でたるものには非ざるか。

スミスの時代に在りてグラスコオ大學は總計三百人内外の學生を有せるに過ぎず、而して精神哲學の講座のみにては正科 (public class) 八九十名、別科 (private class) 二十名を越ゆることあらざりしなり。當時大學の開校期は現今より長く、十月十日より六月十日に及べり。スミスは午前七時半より同八時半に亘りて正科の講義を行ひ、それより午前十一時に彼れが同朝行へる講義に就きて一時間の試驗を行ひ（此の試驗には僅かに朝の聽講生中其の三分の一の出席を見るに過ぎざるの常なりき)、而して一週二回正午十二時に別個の問題に就きて別科生の爲めに講義を行ふの外、スミスは時々宛も特別教師 (tutor) の如く、特殊の學生の爲めに一時間の朗讀講義を行へるが如し。(アスケーニアス Ascanius の名に隱れたるブハン伯 (Earl of Buchan) が一千七百九十一年六月の Bee 誌に寄せたる其の舊師の回想錄參照)。寛柔温良なるスミスは常に學生との會談を避くることなかりしのみならず、彼れ等の間に有爲なる者を看出し、之れを自家に招じ、其の講義の題目及び其の他の問題に就きて

彼れ等と討議し、而して多大なる同情を以て彼れ等が將來の企圖及び計畫に耳を傾くるの常なりき。

六

スミスの最も愛せる門下の一人にジョン・ミラー(John Millar)あり、後年クラスゴオ大學の法律學教授と爲れる人にして、彼れがスミスに傾倒すること大なりしと等しく(Millar, Historical View of the English Government, Bk. II. chap. I. 參照)、スミスも亦たミラーが學生を鼓舞奬勵する上に於て無比の力を有することを推稱し、其の從弟デヴイッド・ダグラス (David Douglas) をグラスゴオ大學に送れるは偏にミラーの講演に列し、之れと會談するの利益を思へるが爲めなり。彼れは終にスミスの自由貿易論を承認することなかりしと雖も、然も當時蘇國に於ける最も有力なる自由主義の使徒なりき。スミスがグラスゴオ大學の教授として行へる講義は彼れが自ら「道德的情操論」及び「國富論」中に公表せる部分を除きてはエドウイン・カンナン (Edwin Cannan)が一千八百九十五年四月二十一日、偶然初對面の辯護士 Charles C. Maconochie 氏より彼れがスミスの法律學講義の筆錄を所藏せること聞知し、翌九十六年之れを刊行するに至るまでは全く吾人に傳存する所なきものと想像せられ、唯だ僅かに吾人はミラーの談る所に據りて其の講義の要旨を知ることを得たるのみなりしなり。(Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms, delivered in the University of Glasgow by Adam Smith reported by a student in 1763 and edited with an introduction and notes by Edwin Cannan, 1896. pp. xi-xxi. 參照)。

即ち彼れ曰く「スミス氏は彼れが初めて本大學に招致せられたる際に任命せられたる論理學の教職に於て直ちに其の先任者の墨守し來れる計畫を著しく離れて、諸學派の論理學及び形而上學よりも更らに興味あり、有用なる性質を有する諸研究に其の學生の注意を導くの必要を觀たり。斯くて彼れは心意の諸力に關する概觀を示し、而して從前識者の注意の全般を占領せる巧妙なる推理方法に關して好奇心を滿足せしむるに必要なる限度に於て古代の論理學を說明せる後、爾餘一切の時間を擧げて修辭學及び美文學の體系を講述するに充てたり。純正哲學の最も有用なる部分たる、人間心意の諸力を解釋し、說明する最良の方法は言語によりて吾人の思想を傳達する諸種の樣式の檢察並びに勸誘及び受容に貢獻する作文上の原則に對する注意より生ず。是れ等の技術に由りて吾人が知覺し又た感覺する一切のもの、吾人が心意の一切の作用は明確に區別し、記憶せらる可き體樣に於て表明せられ、描寫せらるゝなり。同時に文學の諸部門中に在つて、初めて哲學の研究に從へる青年に取りて斯くの如く彼れ等の趣味と彼れ等の感情とを把握するものよりも勝りて適當なるものなきなり。」

「斯の問題に關するスミス氏の講演が其逝去の前に破毀せられたること洵に遺憾に堪えざるなり。最初の部分は措辭の點に於て著しく完成せられ、而して全體に亘りて風韻と創造的天才との强烈なる標號を看出すなり。筆記を行ふの許可を學生に與へたるが爲に、是れ等の講義中に包有せられたる數多の觀察及び意見は其の後公表せられたる獨立の論文中に於て縷述せられ、又たは一般的聚集中に於て淨寫せられたり。然れども是れ等のものは當然豫期せられ得るが如く、彼れ等が其の最初の著者より受けたる獨創の態度と特異なる性質とを失ひて。彼れ等の投

入せられ捲き込まれたる平凡なる事項の複合によりて蒙蔽せられたり。」

「スミスは彼れ等が論理學の教授に任命せられてより凡そ一ヶ年の後、精神科學の講座に選任せられたり。此の問題に關する彼れが講義の課程は四部に分割せられたり。第一は「自然神學」を包有し、彼れは爰に神の存在及び屬性の諸證左並びに宗教の基礎を成せる人間心意の諸原理を考察せり。第二は嚴密なる意義に於ける「倫理學」を包含し、主として彼れが後に至つて其の「道德的情操論」中に公にせる諸學說より成る。第三部に於て彼れは「公正」に關し、又た精緻にして正確なる法則を收受し得可きが故に是れに由りて詳密精細なる說明を行ひ得可き底の道義の部門を更らに巨細に論述せり。」

「此の問題に關し彼れはモンテスキュー（Montesquieu）によりて暗示せられたるの觀ある計畫に從ひ、最も粗野なる時代より最も精錬せられたる時代に至るまで、公私兩法律思想の漸次進步し來りたる跡を探及し、生存及び財產の集積に資する諸技術が之れに相應せる法律及び統治の改正若しくは變更を生ずるの效果を指摘するに努めたり。彼れは其の力作の此の重要なる部門をも亦た社會に發表せんことを期したるも而も彼れは終に「道德的情操論」の結末に誌されたる這般の意向を遂行することなくして逝けり。」

「彼れは其の講義の最後の部分に於て「公正」の原則に基礎を有することなく、「便宜（expediency）」のそれに基き、而して一國家の富と力と繁榮とを增進するものと思料せらるゝ政治的制規を考査せり。這般の見地の下に彼れは商業、財政、宗教的及び軍事的施設に關する政治的制度を考察せり。彼れが是れ等の諸問題に就きて演述せる所のものは彼れが後に至つて「諸國民の富の本質及び原因の研究」なる題下に公にせる著述の要旨を抱有するなり」。

「教授としてよりも更らに好くスミス氏の技倆の現る可き地位は存せざりき。彼れは其の講義を行ふに際し殆ど全く即座の辯術に信賴せり。彼れの態度は優雅ならざりしも純樸にして淡泊なりき、而して彼れは常に其の題目に興味を有するの觀ありしが故に、彼れは決して其の聽者の注意を惹起せずして終ることなかりき。各個の講話は概して彼れが順次に論證し說明せんとせる種々なる特殊の命題より成れり。是れ等の命題は一般的名辭に於て表明せられたる時、其廣漠たることにより幾分逆說（パラドックス）の觀を有すると稱れならざりき。彼は是等のものを解說せんとするに當り、初めは屢々其の主題を十分に會得せざるものゝ如く、幾分口籠りながら物語るなり。

然れども其の進むに從ひ、彼れの態度は熱烈にして活潑と爲り、而して其の表現は圓滑にして流暢と爲るなり。論爭を生じ易き諸點に於ては諸君は容易に彼れが密かに其の意見に對する反對を思料し、而して更らに大なる精力と熱心とを以て之れを擁護するが爲めに此の如き手段に出でたることを察知するを得可し。彼れの擧例の豐富にして多樣なるに由りて主題は漸次其の手中に於て增大し、而して同一意見の冗長なる反復なくして、總べて其の現示せらるゝ種々なる陰影及び相貌を通じて同一問題を追及し、而して後、此の美しき推究の序列が發出せる本源的命題若しくは一般的眞理に之れを復歸せしめて、其の聽衆の注意を捉へ、而して彼れ等に教訓と等しく快感をも與ふるものと思料せられたる廣褒を取得せるなり。

斯くて教授としての彼れの名聲は頗る高きに

至り、而して多數の學生は偏へに彼れ在るが故に遠隔の地より同大學に來れり。彼れの教授せる部門の科學は此の地に於ける流行と爲り、而して彼れの意見は諸倶樂部及び文學會に於ける主たる論題たりき。彼れの發音又たは話說の態度に於ける些細なる特色すら往々にして模倣の對象と爲れり。」と (Stewart, op. cit, pp. 11-13.)。

Essay on the Nature and Principles of Taste, 1790.の著者アーチバルド・アリソン(Archibald Alison)がミドルセックスの副僧正ジョン・シンクレーア(John Sinclair)に談れる所に據れば、彼れは常に講義を行ふに當り、其の聽者の同情に依賴すること遙かに他の諸教授に越えたるの事實を承認せり。彼れ曰く「一學年の全部を通じ、平凡なるも而も表情的なる容貌を有する或る一人の學生は余の成功を判斷するが爲めに余に取りて頗る有用なりき。彼れが柱の前に座せる樣目立ちて見えたり。余は絶えず彼れを注意せり。彼れにして若し前方に乘り出して熱心に耳を傾くる時は成功疑ひなき所にして、余は余の學級をして快く傾聽せしめつゝあるを知る、而も彼れにして若し後方に凭れて不注意の態度を示す時は、余は直ちに萬事非にして余は主題若しくは余が話法の孰れかを變ぜざる可らざることを感ずるなり」と (Sinclair, Sketches of Old Times and Distant Places, 1875, p. 9.)。

彼れの學生の大多數は長老教會の教職たる準備を行ひつゝある青年より成り、其の三分の一は自國の大學より不當に排斥せられたる愛蘭土の非國教徒にして、實に彼のリードが(Dr. Thomas Reid)是れ等の愚鈍なるチーグ(teague 愛蘭土人の異名)に向つて講義するに當りては常に聖アントニーが魚類に向つて傳道せる際に感ぜざるを得ざりしに等しき感を有すと云へる所のものなり(Hamilton, Reid, p. 43.)。尙はスミスの講莚に列せる者に檢事ヘンリー・エルスキーン(Henry Erskine)、ジェムズ・ボズウエル、フイツモーリス(Hon. T. Fitzmaurice)、あり。後年フイツモーリスは有爲の資を抱きて空しく不治の病床に呻吟しながら、永くスミスの講義に列し、其の家庭に寄寓せる樂しき往時を追懷して止まざりきと云ふ。ヴオルテールの友人にして、ルッソーの敵なりしジュネーヴの大醫トロンシャン(Dr. Théodore Tronchin) は特にスミスに就きて學ばしむるが爲めに一千七百六十一年、其の子をグラスゴオに送れり。而してスミスの教授としての名聲は年と共に次第に高まり行きて、漆喰製の其の胸像は書肆の店頭を飾りつゝありしなり。

（未完）

國有鐵道と運賃政策

增井幸雄

一

分業が人と人との間に行はれ地方と地方との間に行はれて居る所の現代の經濟生活は交通機關なくしては支持せられ難い。交通機關の一種たる鐵道は、此の意味に於て現在の社會の支持者であり、その根本的の基礎をなして居るものである。又鐵道の存すると否とは其の地方の繁榮衰頽を岐つの原因となり、少くとも其の發達に遲速の相違を來さしめる。同じく鐵道の存する場所に就て見るも、鐵道が各地に對し各人に對し又は各貨物に對して其の取扱上に不當の差別を設けるときは、特惠せらるゝものと然らざるものとの間に於ける相對的地位に多大の相違